

## 彼らの悪意に気づかれた マタイ22:15~22 / 李正雨師

見え透いたという言葉があります。相手の意図や言い訳や目的などが見えたとき、こういう言葉を使いますよね。私は、このような姿をうちの子供たちに見ることもあります。たまにうちの子供たちは、下校の後、家に入りながら親に聞こえる声で「疲れた」と言います。それで「疲れたの?」と聞いてみると、「学校でたくさん勉強して疲れた」と答えます。このような答えには、意図と目的があるでしょう。今日はこれ以上、勉強したくないということです。これが分からない親は、おそらくいないでしょう。しかし、たまには親も許してあげます。疲れたと言ったから、今日は休んで明日から勉強しようと言います。すると、子供たちは大喜びで、頑張ってスマートフォンゲームをします。疲れたのに、どうしてそんなにゲームは頑張ることができるのか… 気になります。

ところが、子供たちだけがこのように見え透いた話をするわけではありません。大人も同じでしょう。子供の時から慣れてきたからなのか、はるかに気の利いた言葉で話します。意図と目的がはっきり見えるにもかかわらず、上手に自分の言葉を飾ります。もしかして、このようなことは、社会生活に必要なテクニックなのかもしれません。しかし、このようなことに直面すると、気分はあまり良くないでしょう。たぶん私たちの中には、真実を求めている良心というものがあるからではないかと思えます。これをよく示してくれるのが、ルカによる福音書18章のファリサイ派の人と徴税人の祈りです。ファリサイ派の人は、自分の正しさを見せるために、自分が行ったことを並べ立てながら祈ります。自分がどのように律法に忠実だったか、善い行いに最善を尽くしたかを声をあげて祈ります。一方、徴税人の祈りは、自分を憐れんでくださいという祈りだけでした。私は、この二人の祈りには、偽りはないと思えます。ファリサイ派の人が徴税人より、律法的に行動的に正しかったのだと思えます。しかし、イエス様はファリサイ派の人ではなく、徴税人を義とされたと言われます。ファリサイ派の人には、自分の正しさを示して、他人を見下そうとした意図があったからです。

今日の福音書でも、このような意図や目的などについて語っています。いや、今日の福音書の意図と目的は、これよりももっと悪いと思えます。イエス様をただ困らせるためだけでなく、イエス様を律法的に社会的に抹殺しようとした意図があったからです。これは、イエス様が議論とたとえを通して、神殿の祭司長たちとファリサイ派の人々の間違いを指摘され、皮肉られたためです。そして、このことを神殿に集まった大勢の人々が見たので、ファリサイ派の人々は復讐しようとしています。自分たちがやられたように、イエス様の言葉じりをとらえて、畏にかけるように、イエス様を支持している群衆がイエス様から去るように、策を巡らします。群衆がイエス様から去るなら、イエス様を簡単に捕まえることができるでしょう。それで、彼らは相談の上、イエス様のところに自分たちの弟子たちとヘロデ派の人々を遣わします。今日の福音書15-16節の言葉です。「それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、畏にかけようかと相談した。そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。」

私はこの言葉の中で、「イエスの言葉じりをとらえて、畏にかけようかと相談した」という言葉より、「自分の弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエス様のところに遣わした」という言葉がより衝撃的でした。伝統的に、ファリサイ派の人々とヘロデ派の人々は、仲良い関係ではありませんでした。律法を守るファリサイ派とローマと政治的なつながりを持たなければならないヘロデ派とは行く道自体が違いました。それにもかかわらず、この二つの派の人々は、一緒にイエス様のところに遣わされました。その理由は、彼らの言葉や質問を通して明らかに知ることができます。彼らはイエス様にこう尋ねます。16~17節の言葉です。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。ところで、どうお思いでしょうか、お教えてください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」

彼らはイエス様のことを「先生」と呼びます。このことが起こる前日、イエス様が神殿の商人を追い払って人々を教えられたとき、イエス様は神殿の人々から「何の権威でこのようなことをしているか」と言われまし

た。ところが、今日の福音書では「先生(διδασκαλε)、教える者」と呼ばれます。これは、イエス様を先生として認めたのではなく、言葉の畏にかけるつもりで「先生」と呼んだのです。さらに「真実、真理、神の道、誰をもはばかれない」などの言葉によって、イエス様が必ず答えなければならない状況に導いていきます。そして、税金について話します。これは、当時話題になっていたことです。使徒言行録5章37節にも書いてありますが、ガリラヤのユダという人が税金のことでローマに対するクーデターを起こしました。これは、イエス様の幼い頃に起こったことで、多くの人がユダに従いました。しかし、すぐにローマの総督キリニウスによって、クーデターは無慈悲に鎮圧されました。ユダは滅び、人々はちりぢりにさせられました。ローマ軍は、税金は選択ではなく、義務だという警告のしるしで、多くの革命家を十字架にかけて殺しました。

ところが、ファリサイ派の弟子たちとヘロデ派の人々は、このことをイエス様のところに持って来たのです。もしイエス様が税金を払わなければならないと言うなら、イエス様はユダヤ人のメシアではなく、親ローマの人になるでしょう。そうすれば、群衆はイエス様から去り、イエス様はユダヤ人の権力者に捕まることとなります。逆にイエス様が税金を払ってはならないと言うなら、ヘロデ派の人々がこれをヘロデに告げるでしょう。そしてイエス様は、ローマ軍によって捕まることとなります。あれもこれも、答えにくい状況になったのです。ここでイエス様はこう言われます。18～19節の言葉です。「イエスは彼らの悪意に気づいて言われた。『偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。税金に納めるお金を見せなさい。』彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、」

イエス様は彼らの下心に気づかれました。彼らの質問の中で、どれほど大きな悪意があるか、彼らの目的が何かをお分かりになりました。彼らは、良く飾られた刀を持ってイエス様のところに来たのです。真実を知ろうとしたわけでもなく、議論に勝とうとしたわけでもありませんでした。イエス様を捕まえて殺すこと。これが彼らの意図でした。ファリサイ派の人々は、律法を守らなければならないと主張しました。神様の律法だけが自分たちの基準になると言いましたが、彼らは、「殺してはいけない」という戒めを守るつもりはありませんでした。彼らにとって神様の言葉は、ただ自分の正しさを示すものに過ぎませんでした。そして私は、このような姿が私たちの内面に隠されている人間の本性かもしれないと思いました。自分の利益のため、自分の立場と地位を保つためには、どんなことでも行う悪。これが、今イスラエルとガザ地区で起こっていること、ロシアとウクライナで起こっていること、ミャンマー、アフガニスタンなどの地で起こっていることだと思います。

イエス様は、ご自分を試そうと思っているファリサイ派の弟子たちに「税金に納めるお金を見せなさい」と言われ、彼らはデナリオン一枚を持って来ます。先月、聖書の分かち合いで、私はここにいらっしゃる何人かに新約聖書の時代に使っていた通貨について申し上げました。デナリオンは労働者一日分の賃金として、銀で作られたローマの通貨です。ローマの通貨であるため、デナリオンには、皇帝の肖像と銘が刻まれていました。そして、この銘は「神の子ティベリウス、いと高き司祭」という銘でした。しかし、このような文章が刻まれているからといって、この通貨を持っていなかったり、使わなかったりした人は、いませんでした。税金だけのための通貨ではなく、一日の賃金としてのお金だったからです。つまり、ユダヤ人たちは、皇帝の肖像と銘が刻まれたお金で、生活をしていたのです。だから、そのお金が再び税金として納められることだけを、悪いと思ってはいけなかったと思います。イエス様はファリサイ派の弟子たちに、デナリオンの肖像と銘が誰のものかと言われ、彼らは「皇帝のものです」と尋ねました。するとイエス様は「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい(21節)」と言われます。悪意を抱いて税金についての可否を尋ねたファリサイ派の弟子たちに、律法を立たせながら殺そうとしたファリサイ派の人々に非常にふさわしいお答えだったと思います。

私は、神様が私たちの人間の意図と目的を知らないわけではないと思います。まるで子供たちの心を皆知っている親のように、私たちのすべての考えと心を知っておられると思います。ですから、少なくとも私たちは、意図と目的を持って神様の前に立つてはいけません。神が騙されるという思いは、全く私たちだけの思いに過ぎません。私たちのすべての意図と目的を捨てて、神様に賛美し、祈り、礼拝をささげましょう。そして、その中で神様の御心を求めましょう。そうすれば、私たちの必要をご存知である神様が皆様の必要なことを満たしてくださるでしょう。純粋に神様を信じている皆様に、神様からの大きな恵みがありますように。意図などを捨て、真実を求められる皆様になりますように、主の御名によって祈ります。アーメン